

蔵文対応形式から見た舟曲県チベット語拱壩[dGonpa] 方言の特徴

——舟曲県チベット語の概説を添えて——

鈴木博之

1 はじめに

本稿では中国甘肅省甘南族自治州舟曲[ʼBrug-chu]¹ 県拱壩[dGon-pa] 郷で話される dGonpa 方言の語形式とチベット文語形式（以下「蔵文」）の主要な対応関係を明らかにし、それに基づいて dGonpa 方言のチベット言語学上の特徴を議論する。

本稿で議論の対象とする dGonpa 方言の主要な資料は、筆者の調査によって得られたものである。調査は 2012 年、四川省成都市で行った。調査協力者はウェン・ドウカ[Bon gDugs-dkar] さん（男性、20 代）で、拱壩郷先鋒行政村勒臥[Lha-yul] 自然村の出身である。本協力者の研究（Bon gDugs-dkar 2013）も必要に応じて参照した。

2 舟曲県のチベット語概況

舟曲県で話されるチベット語諸方言は、いまだにその全体像が提示されたことのないものである。そのため、分析に先立って舟曲県で話されるチベット語についての概況を整理し、同時に先行研究における問題点も指摘する。

2.1 地理と言語分布

舟曲県は甘南州の南東端に位置する（図 1・2 参照²）。西に迭部[The-bo] 県と接し、北に隴南市宕昌[The-rgyud] 県と接し、北東に隴南市武都区と接する。南は大部分が四川省阿壩[rNga-ba] 藏族羌族自治州九寨沟[Khod-po-khog] 県と接し、南東部に隴南市文県と接する。これらの中で隴南市は住民の大多数が漢族であり、舟曲県も甘南州の中では住民における漢族の比率が高く、県城（県政府所在地）の城關鎮は漢族で占められる。すなわち、舟曲県はチベット文化圏と漢文化圏の境界に位置するといえる。県内のチベット族の居住地域は県中央を占める漢族中心の地域によって県北西部と県南東部に分断されている。

¹チベット語に由来する固有名称もしくはチベット名が判明している地名は、初出の箇所ではチベット文語形式を [] に入れて示す。

²地図は本稿の末尾に配置している。以下、図 3・図 4 も同様。

さて、舟曲県の言語状況を紹介した文献はほとんど存在しない。そのような中で、《舟曲県誌》(1996)は言語について詳細な情報を提供している。《舟曲県誌》(1996:617)によると、舟曲県のチベット語は大きく北西方言群と南東方言群の2種に分けられている。また、同書には語例も多数あがっている(pp.618-628)。

一方で筆者が調査協力者を含む複数の舟曲県出身のチベット語話者から得た情報によると、舟曲県のチベット族の言語は以下のように、2言語種に分かれるという。

- チベット語
 - － 北西部の方言群
 - － 江盤[rGyal-bde]郷の方言
 - － 南東部の方言群
- ペマ語

以上のうち、ペマ語が舟曲県にも分布していることはほとんど知られていないが、楊士宏(2009:1)に言及がある。ペマ語とチベット語の間には密接な関係があると考えられるが、相互理解度はきわめて低い。ペマ語は舟曲県最南端に位置する博峪[Bod-yul]³郷の岔路溝[Tsha-lung]村などのいくつかの集落のみに分布し、もはや老年層の話者しかおらず、より若い世代では漢語を話している。

3種のチベット語について見ると、まず「北西部の方言群」は《舟曲県誌》(1996)のいう北西方言群に相当する。分布地域として、曲瓦[Chu-dkar]⁴郷、巴藏[’Ba’-gtsang]郷、慇班[Bod-rtsa]郷⁵、峰迭[Khams-sgang]郷などがあげられる(図4参照)。この方言群は舟曲県に西接する迭部県の東部で話される Thewo-smad(下迭部)方言群とともに1グループを形成し、舟曲県に独自の方言ではなく、他の2種との相互理解度も低い。次に江盤郷の方言と南東部の方言群は、母語話者にとって互いに近い関係にあると認識されているようである。江盤郷は县城から見て白龍江[’Brug-chu]をはさんで対岸に位置する。最後に南東部の方言群は南峪郷、果耶[sGo-yag]郷⁶、八楞[Ong-gsum]⁷郷、武坪[Bod-pa]郷、插崗[Tsha-ba-sgang / Tsha-sgang]郷、拱壩郷、大年[sTag-gnyan]郷、鉄壩[Them-pa]郷、博峪郷などで話され、さらに武都区坪壩

³この郷名は確かに蔵文 Bod-yul の対応形式であるが、現地のチベット族による伝統的な名称(dGonpa 方言では^htu fia/)が存在し、過去にはその名称の漢字音写と思われる「代巴」が用いられていた(《舟曲県誌》1996:92)。また、博峪郷は1963年から1984年まで文県に所属していたため、博峪郷のペマ語は文県に分布するペマ語として理解された可能性もある。

⁴Chu-bar とつづられることもある。

⁵旧名を黒峪[gSer-po]郷という。

⁶旧三角坪郷および旧池干郷が合併して生まれた郷であるが、旧名のほうが通用性が高い。

⁷’Od-zer とつづられることもある。

郷でも用いられる (図3 参照)。筆者は江盤郷の資料を収集していないため、両者の間にどの程度の差異が認められるかは不明である。一方で、本稿で議論する dGonpa 方言が属する県南東部の方言群は母語話者が1つの方言群と見てはいるものの、チベット言語学的には1つの方言群とみなしがたいほど大きな差異が認められる⁸。

南東部の方言群における方言差異について、調査協力者による推測によれば、主要交通路沿いに位置しない各郷間の往来は少なく、各方言の形成に方言接触が与えた影響が低く見積もられ、結果的に方言差が相対的に大きくなっている可能性があるという。その一方で歴史的観点から、《舟曲県誌》(1996:603-604)に整理されている明朝から行われた「土司制度」による支配地域の違いもまた指摘できるだろう⁹。現在の舟曲県は、明朝以降、黒峪・宕昌・卓尼の3土司の支配地域に分かれていた。黒峪土司の領域は先の方言区分でいうところの北西部にあたる地域を占めていた。宕昌土司の領域は現在の八楞、果耶、武坪各郷で、南東部の方言群が分布する地域の北部を占めていた¹⁰。ただし清代の一時期は卓尼土司の管轄下に置かれていた。卓尼土司の領域は現在の拱壩、大年、鉄壩、博峪各郷で、南東部の方言群が分布する地域の南部を占めていた。南東部の方言群の分布地域は歴史的には異なる所属になっていた点が方言形成に与えた影響は少なくないと考えられる。また、現在の江盤郷について、明代は卓尼土司の領域であり、清代は宕昌土司の領域になっていることから、八楞、果耶、武坪各郷と同様に歴史的により複雑な経緯が存在した地域といえる。いずれにせよ、各種方言の具体例に基づいて検討する必要がある。

以上に整理した点および筆者の調査によって得られた資料から、舟曲県のチベット語の分類案を次のように考える。

- Thewo (迭部) チベット語
 - － Thewo-smad 方言群
- mBrugchu (舟曲) チベット語
 - － Ongsum 方言を含むグループ
 - － dGonpa 方言を含むグループ
 - － 江盤郷の方言を含むグループ

この案はさらに多くの地点の調査とチベット言語学的な考察を通して検証されるべきものである。また、Tournadre & Suzuki (forthcoming) の記述も参照されたい。

⁸筆者は dGonpa 方言のほかに Ongsum (八楞) 方言および Tshagang (挿崗) 方言も記述している。具体例については5節の記述を参照。

⁹さらに詳細な歴史的記述は洲塔 (1996)、洲塔・喬高才讓 (2011) にある。

¹⁰八楞郷への主要交通路は現在でも宕昌県から直通で存在し、舟曲県城からでも宕昌県内を通過する。

2.2 言語学的な先行研究

舟曲県のチベット語に関する詳細な言語学論文は未見である。しかし、チベット語の方言区分を扱う先行研究において「舟曲方言」は頻繁に言及され、「アムド地域に分布しながらも声調をもつ方言」として、瞿靄堂・金效静(1981)、張濟川(1993)、瞿靄堂(1996)、Zhang(1996)、Sum-bha Don-grub Tshe-ring(2011)などにおいて、舟曲県のチベット語はカムチベット語であると言われている¹¹。ところが、以上の先行研究における「舟曲方言」には、1つの大きな疑問がつきまとっている。「舟曲方言」が現在の舟曲県に独自の方言（すなわち江盤郷の方言かまたは県南東部の方言）の記述ではないという疑問が存在するのである。その背景を理解するためには、調査が行われたころの舟曲県の歴史を考慮しなければならない。

Zhang(1996)の記述から推測すると、1950年代に中国で行われた少数民族言語の一斉調査（普查）および1980年代に行われた方言調査において、舟曲県では1地点のみ調査されたと理解できる。ところが張濟川(2009)には不可解な記述があり、引用される方言名に「舟曲（洛大）」となって現れている。洛大というのは、現在の行政区画に照らせば迭部県洛大[Rong-thag]郷のことを指すと考えられる（図4参照）。言い換えれば、「舟曲方言」は現在の迭部県の記述報告になるといえる。このような事態が起こっている背景には、ちょうど1950年代の一斉調査のころに舟曲県の行政区画が変更になっていること（《舟曲県誌》1996:70-71）が影響していると推測できる。「舟曲」の名称が公式に現れるのは1954年のことであるが、その当時は洛大郷も舟曲県に帰属していた¹²。それが1961年になって、洛大郷が舟曲県から迭部県に移管された。このため、1950年代後半は洛大郷が舟曲県に含まれていたことになる。一方、本稿で扱うdGonpa方言が話される拱壩郷をはじめ、大年、鉄壩、博峪各郷一帯は1958年まで卓尼県の一部であった（《舟曲県誌》1996）ため、これらの地域で話される変種は舟曲県の方言とみなされることがなかったかもしれない。

さて、洛大郷の方言は舟曲県北西部の方言とともにThewo-smad方言群を構成している。また、Zhang(1996)には迭部県の調査地点として2地点（迭部と色繞龍哇[gSer-rong Lung-ba]¹³）があがっていることから、結果的に迭部県で3地点の資料が記録されたのではないかと推測できる。なお、Thewo-smad方言群については、共確加措(1987)およびTournadre & Konchok Jiatso(2001)に記述されている¹⁴。迭部県の

¹¹特に瞿靄堂(1996)やSum-bha Don-grub Tshe-ring(2011)などでは、舟曲方言をカムチベット語の中における1つの独立した下位方言とみなしている。

¹²洛大郷は明代以降岷県が多納[La-tsha]土司の領域に含まれていた。清代に黒峪土司、すなわち舟曲県北西部の土司とも関係があった。

¹³gSer-rong Lung-baとは、特定の行政区画を指すものではない。この方言の記述はおそらく共確加措(1987)によるものと考えられる。

¹⁴これらの研究は迭部県桑壩郷のByamba（桑壩）方言の記述であると考えられる。

方言については、現段階では卓尼県および舟曲県の方言とともに、アムドチベット語から排除されて（通常はカムチベット語に分類されて）いるが、実際に「迭部」の名称を方言分類で用いたのは張濟川(1993)が初めてであり、瞿靄堂・金效静(1981)には記述されていない。迭部の名称が用いられている方言研究は1980年代に入ってから現れてくる。1950年代の調査は迭部県と舟曲県の間で行政区画が変更になった時期と重なっており¹⁵、また張濟川(2009)の言及も考えると、先行研究の「舟曲方言」が舟曲県に独自の（すなわち県南東部の）方言でなく現迭部県のものであった可能性が高くなる。このことが先行研究における「舟曲方言」を独立方言群と考える枠組みにも影響を与えてしまうという点に十分な注意が必要とされる。

一方、1950年代の調査資料に基づかない言語学論文の中に舟曲県のチベット語に言及するものもある。たとえば、楊士宏(2009:85-95)がそうである。同書の記述では、舟曲県立節 [gLu-rtse] 郷の方言が調査されたと見られる。しかしながら、この方言もまた Thewo-smad 方言群に属すると考えられ、舟曲県に独自の方言ではない¹⁶。

いずれにせよ、先に述べた疑問点を考えるに当たり、先行研究の記述と筆者による記述を対比させる必要がある。この問題について検討するためには、まず筆者の記述する dGonpa 方言のチベット言語学上の特徴を明らかにしておく必要がある。そのため、先に同方言の分析を行い（3、4節）、その結果を用いることで、先行研究に見られる形式を検討することにする（5節）。

2.3 舟曲県のチベット語の「カムチベット語所属説」に関する検討

結論を先に述べると、舟曲県で話されるすべてのチベット語方言はカムチベット語には属しない。言い換えれば、カムチベット語に所属すると考える歴史的・言語学的根拠は存在しないといえる。Tournadre & Suzuki (forthcoming) はまったく新しい観点からの言語分類を提案し、舟曲県チベット語とカムチベット語は異なる言語として考えることができるという見解を提出している。それでは、先行研究はなぜ舟曲県のチベット語をカムチベット語と分類することが多いのだろうか。

これには、従来の方言分類の方法論と音声分析のあり方の2点に問題があると筆者は考えている。中国で行われている従来のチベット語方言研究において、大部分の方言はその類型の特徴¹⁷に基づいて、ユー・ツァン、カム、アムドの3大方言区のいずれかに分類する方法をとってきた。すなわち、方言分類の根本的な選択肢が3

¹⁵1959年の一時期、舟曲県は「龍迭県」というように、名称さえも変更している。その背景は《舟曲県誌》(1996)にも記述がない。

¹⁶なお、筆者の調査協力者によると、現在立節郷にチベット語話者はほとんどいないとされる。

¹⁷この基準をはじめて明確にしたのが瞿靄堂・金效静(1981)である。西(1986)にも詳しい解説がある。

つしかないのである。当然分類指標は非常に簡素で、先行研究において記述する舟曲県チベットの語は声調の対立を有し、かつ有声阻害音が存在するという点に基づいて、それがカムチベット語の特徴に合致するとみなされることから、カムチベット語に分類されるようになったと考えられる。これが従来の方言分類の方法論に見られる問題である。2点目の音声分析のあり方の問題としては、舟曲県のチベット語において認められるという「声調」が何であるのかという問題である。本稿5、6節で検討するように、先行研究において認められるピッチパターンによる声調の対立は、筆者の記述では音韻機能を担っていないと分析される。つまり、声調の有無といっても、声調の音声学的特徴はすべての方言において一様であると言える保証はない。すなわち、先行研究の「声調」は、いったん「超分節音素」と言い換え、その音韻機能の有無のみならず、その音声学的特質（朱曉農(2010)参照）も明確化しなければ、同じグループとして扱えるかどうかは言えないことになる。

以上、従来のチベット言語学における言語学的基準による方言分類の問題を述べた。しかしこの分類法では、舟曲県のチベット語話者の祖先に関する歴史学的考察が欠けている。先行研究において、舟曲県およびその周辺の迭部県、卓尼県のチベット語がアムドチベット語と異なる類型をもつ点について、これらの地域のチベット語話者の祖先が、吐蕃時代にラサ周辺の地域から移住してきた人々であるということと結びつけて理解されている（楊士宏(2009:94-95)など）。この歴史的経緯を明確に記載する歴史文献は未見であるけれども、さまざまな文献における記述と民間伝承を総合すると、これらの地域におけるチベット人のおおよその祖先がどの地域から来たのかということを推測することができる。洲塔(1996:12)や周毛草(2003:2)、Sum-bha Don-grub Tshe-ring(2011:37-38)に記述されるように、舟曲県のチベット人は現チベット自治区の工布[Kong-po]地区からの移民の末裔であるといわれている。同様に、迭部県のチベット人は現チベット自治区の達布[Dwags-po]地区からの移民の末裔、卓尼県のチベット人は現チベット自治区の澎波[Phan-po]地区からの移民の末裔といわれている。これらの地域は伝統的にチベット中央部に属し、カム地域ではない。それゆえ、これらの地域からの移民であるというのが史実ならば、カム地域で話されている言語変種と舟曲県のチベット語との間に歴史的関連を認めることはできず、後者がカムチベット語に属する必然性もまた存在しない。

言語学的特徴だけをもって行う従来のチベット語の方言分類というのは、諸方言間に認められる改新の類型が類似しているというだけのものであり、共通の方言形式からの発展（たとえば西田(1987:126)のモデル¹⁸）を考慮していないという点で、大きな問題を抱えているといえる。

¹⁸ただし西田(1987:126)のモデルの適切性は別の問題であり、本稿では扱わない。

3 dGonpa 方言の音組織

dGonpa 方言の音組織について、母音と子音に分けて提示する。加えて音節構造を示す。詳細な記述は Suzuki (forthcoming) を参照。分節音の表記は原則音素表記とし、音声表記は [] に入れて示す。

母音

二次的調音も含めた一覧は次のようである。

二次調音なし	i	e	ɛ	æ	a	ə	ɑ	ɔ	o	u	ʊ	ɤ	ʉ
そり舌化	i̠	e̠			a̠	ə̠	ɑ̠		o̠	u̠	ʊ̠	ɤ̠	ʉ̠
弱軟口蓋化							ɑ̠ ^ʷ	ɔ̠ ^ʷ		u̠ ^ʷ	ʊ̠ ^ʷ		

長短は弁別されない。すべての母音は長くも短くも発音される可能性がある¹⁹。

子音

子音連続に現れるものも含めた一覧は次のようである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h			k ^h	
	無気	p	t	t̚			k	ʔ
	有声	b	d	d̚			g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h	çɕ ^h		
	無気		ts		tɕ	çɕ		
	有声		dz		dʑ	jʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h	çɕ ^h -xɕ ^h	x ^h	
	無気		s	ʂ	ɕ	çɕ-xɕ	x	h
	有声		z		ʐ	ʐj-j-ɣj	ɣ	fi
鼻音	有声	m	n		ɳ		ŋ	
流音	有声		l	r				
半母音	有声	w				j		

<çɕ^h-xɕ^h>, <çɕ-xɕ>, <ʐj-j-ɣj> はそれぞれ 1 音素であり、音声実現に従い書き分ける。

有声の阻害音は子音連続の一部に現れる事例が多い。

子音連続には主として前鼻音、前気音²⁰を含むものがある。

¹⁹ 長音符号を表記しないからと言って、母音が常に短いのではない。長音になる条件は規定される性格のものではないが、複音節語では第 1 音節が、句ではもっとも主要な語幹部分が長く発音される傾向にあるといえる。

²⁰ そり舌閉鎖音およびすべての破擦音に先行する前気音は、無声のときには [x, ʉ̠], 有声のときには [x̠] で発音されることが多い。

音節構造

音節構造は、鈴木 (2005b) を参照して以下のように記述できる。

cC_iGV

このうち C_i (主子音) と V (音節核の母音) が必須である²¹。

最初頭子音^cは前鼻音、前気音の2種が現れる。わたり音 G には w, j がある。よって最大の初頭子音の構造は3子音連続となる。

末子音は認められない。

4 dGonpa 方言の蔵文との対応関係

本節では筆者による一次資料に基づき、西 (1986) や西田 (1987)、張濟川 (2009:259-357) などに提示されるチベット言語学の方法論を参考にしつつ、dGonpa 方言の特徴をまとめる。分析対象は口語形式に限るが、注意の必要な蔵文の読書音は注記する。

なお、蔵文は Wylie 式の転写で示す。チベット文字の表す音価は格桑居冕・格桑央京 (2004:379-390) を参照。

議論は初頭子音、母音＋末子音の2種に分けて行う。

4.1 初頭子音

4.1.1 閉鎖・破擦・摩擦音の有声性

dGonpa 方言では、閉鎖・破擦音および摩擦音について、蔵文で先行子音 (頭字、前接字) を伴わない有声音基字 $g, j, d, b^{22}, dz, zh, z$ は、基本的にそれぞれの調音位置の無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

$k\phi$ 「誰」 (<i>gang</i>)	$po\ fiu$ 「ロバ」 (<i>bong bu</i>)
$c\phi\phi$ 「茶」 (<i>ja</i>)	$\text{ʔa}\ x\phi$ 「母方のおじ」 (<i>a zhang</i>)
to 「熊」 (<i>dom</i>)	so 「家畜」 (<i>zog</i>)

また、これらの文字に足字がある場合も同じく無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

$s\phi$ 「鶏」 (<i>bya</i>)	t_u^u 「6」 (<i>drug</i>)
ts_x 「小麦」 (<i>gro</i>)	$^h\text{t}\phi$ 「岩」 (<i>brag</i>)

²¹ しかしながら、語中においては ϕ という音節が存在する。また、語中に存在する $r\phi$ という音節はしばしば $[\phi]$ と発音され、これらの例に限って母音のみの音声実現が存在する。

²² 蔵文 b は特に固有名詞において w と対応する例があるが、これは読書音と考えられる。

以上の蔵文有声音字について、閉鎖・破擦字に先行子音が存在するとき、dGonpa 方言では通常有声前気音を伴う無声音で現れる。ただし、有声音で現れる例もある。たとえば、以下のようである。

^h tɕ 「石」 (<i>rdo</i>)	^h kə 「愛する」 (<i>dga'</i>)
^h kɕ 「門」 (<i>sgo</i>)	^h bu ^u 「どら」 (<i>sbug</i>)
^h tsə 「漢族」 (<i>rgya</i>)	^h də fiu 「村」 (<i>sde ba</i>)

ただし、fiu^u 「空気」 (*dbug*s)、^hwa 「泡」 (*lbu ba*)、^mbu^u ja fiu 「蛙」 (*'bu sbal ba*) など例外である。

蔵文摩擦音字に先行子音が存在するとき、dGonpa 方言では通常有声音で現れる。有声前気音を伴うこともある。たとえば、以下のようである。

^h zə ^h po 「体」 (<i>gzugs po</i>)	zɣə ^u 「4」 (<i>bzhi</i>)
---	--------------------------------------

4.1.2 蔵文 sh, zh; s, z 対応形式

蔵文 sh, zh について dGonpa 方言では音声学的には非常に多くの対応関係があるが、軟口蓋摩擦音を含む調音が比較的多く認められる。たとえば、以下のようである。

x ^h ə 「肉」 (<i>sha</i>)	xa ^m bu 「帽子」 (<i>zhwa</i> ? ²³)
?a xɔ 「母方のおじ」 (<i>a zhang</i>)	zɣə ^u 「4」 (<i>bzhi</i>)

ただし、後続の母音が /i, e, u/ の場合、前部硬口蓋摩擦音が対応する例がある。たとえば、以下のようである。

ɕ ^h i 「虱」 (<i>shig</i>)	ɕi ^m bɕ 「おいしい」 (<i>zhim po</i>)
ɕ ^h e 「丸太」 (<i>shing</i>)	^h ɕu 「鋏」 (<i>gshol</i>)

蔵文 s, z 対応形式は、後続の母音が /i, e, ɛ/ の場合を除き、歯茎摩擦音が対応する。たとえば、以下のようである。

s ^h ə 「土」 (<i>sa</i>)	so 「3」 (<i>gsum</i>)
sa mə 「ごはん」 (<i>za ma</i>)	^h zɔ fiɕ 「よい」 (<i>bzang po</i>)

後続の母音が /i, e, ɛ/ の場合、基本的に前部硬口蓋摩擦音が対応する。たとえば、以下のようである。

²³ 蔵文形式における ? は、dGonpa 方言の形式に対応する蔵文が不明であることを表す。

^hçi na 「金 (きん)」 (*gser nag*) ç^hε 「心」 (*sems*)
^{fi}ze 「袈裟」 (*gzan*)

4.1.3 蔵文 c, ch, j; ts, tsh, dz 対応形式

蔵文 c, ch, j について dGonpa 方言では、基本的に硬口蓋破擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

cç^hu 「水」 (*chu*) ^hcça 「鉄」 (*lcags*)
 cçə 「茶」 (*ja*)

ただし、後続の母音が /i, e, u/ の場合、前部硬口蓋破擦音が対応する。たとえば、以下のようである。

^utç^hi m^{bə} 「肝臓」 (*mchin pa*) ^utç^he ŋgo 「脇」 (*mchan 'go*)
^htçi 「1」 (*gcig*) tç^hu 「お経」 (*chos*)

以上の調音位置の異なりは音韻的な条件に起因するため、たとえば以下の語の第1音節のように、同じ形態素でも異なって現れることがある。

^hcçu^m tçi 「11」 (*bcu gcig*) ^htçe ^{fi}tə 「17」 (*bcu bdun*)

蔵文 ts, tsh, dz について dGonpa 方言では、基本的に歯茎破擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

ts^{hə} 「寿命」 (*tshe*) ^htsə 「草」 (*rtswa*)
^htçi ^{fi}mə 「肋骨」 (*rtsib ma*) ⁿdzɤ 「ゾ²⁵」 (*mdzo*)
^htɕa m^{bə} 「ツアンパ²⁴」 (*rtsam pa*)

ただし、後続の母音が /i, e, æ/ の場合、前部硬口蓋破擦音が対応する例がある。たとえば、以下のようなものである。

^htçi 「数える」 (*rtɕi*) ^htçæ ŋi 「探し出す」 (*btsal ?*)
 tç^he 「脂肪油」 (*tshil*)

加えて、蔵文の後続母音が i の場合にも前部硬口蓋破擦音が対応する例がある。たとえば、ⁿdzə 「引っかけ」 (*'dzin*) など。

²⁴裸麦を粉末にしたもので、麦こがしに似る。

²⁵ヤクと牛の混合種。

4.1.4 蔵文 Py 対応形式

蔵文 Py は、p, ph, b に足字 y を伴う形式を含む形式についていう。dGonpa 方言では基本的に歯茎摩擦音が対応する。たとえば、以下のようである。

sə 「鶏」 (*bya*)

s^hə 「開ける」 (*phye*)

ᵑs^ha 「掃く」 (*'phyag*)

^hsa ᵑgu 「狼」 (*spyang khu*)

ただし、蔵文 Py 対応形式の中には前部硬口蓋摩擦音になるものもある。たとえば、以下のようである。

^hcu k^hu 「春」 (*dpyad ka*)

ɕ^hɔ xo 「裕福な」 (*phyug po*)

どちらの調音位置に対応するかは語彙的に決まっているようである。

なお、蔵文 dby は/j/を含む形式に対応する。たとえば ^ɸji lə 「暖かい季節」 (*dbyar* ?) など。

4.1.5 蔵文 Ky 対応形式

蔵文 Ky は、k, kh, g に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式についていう。dGonpa 方言では基本的に歯茎破擦音が対応する。たとえば、以下のようである。

ts^hə 「犬」 (*khyi*)

ᵑts^ha^ɰ mɤ 「寒い」 (*'khyags mo*)

^ɸtsa^ɰ fii 「100」 (*brgya gcig*)

ただし、後続の母音が/i, e, ʊ/の場合、前部硬口蓋破擦音が対応する。例によっては前部硬口蓋摩擦音が対応するものもある。たとえば、以下のようである。

^ɸtɕe 「8」 (*brgyad*)

^hçi 「幸せな」 (*skyid*)

tɕ^hʊ 「あなた」 (*khyod*)

4.1.6 蔵文足字 r 対応形式

蔵文足字 r を含む形式には、Pr (=pr, phr, br を含む形式)、Kr (=kr, khr, gr を含む形式)、tr/dr など閉鎖音を含むもののほか、sr などもある。dGonpa 方言では、sr を除いて基本的にそり舌閉鎖音が対応するが、それぞれの対応形式に細かな違いが認められる。そのため、各形式に分けて例をあげていく。

蔵文 Pr 対応形式

dGonpa 方言では多くがそり舌閉鎖音に対応する。たとえば、以下のようである。

^h ʈa 「岩」 (<i>brag</i>)	^h a ʃiʊ kɣ 「細い」 (<i>phra bo</i>)
^ɳ dʷa ʃiʊ 「米」 (<i>'bru</i>)	^h ʈu 「猿」 (<i>spre'u</i>)
^ɳ də 「書く」 (<i>'bri</i>)	

「岩」の例のように、藏文で先行子音字を欠く *br* の例にも前気音が現れることがある。

ただし、藏文 *sbr* には ^ɦr/ が対応する。

^ɦ ra ʃiʊ 「蜜蜂」 (<i>sbrang 'bu</i>)	^ɦ ru 「蛇」 (<i>sbrul</i>)
--	--------------------------------------

藏文 Kr 対応形式

dGonpa 方言では主に歯茎破擦音、前部硬口蓋破擦音、そり舌閉鎖音の3種に対応する。まず歯茎破擦音の例については、以下のようなものである。

ts ^h a 「血」 (<i>khrag</i>)	^ɦ tsə 「声」 (<i>sgra</i>)
^h tsə ʃi 「ナイフ」 (<i>gri ?</i>)	^ɳ dzɣ 「行く」 (<i>'gro</i>)

「ナイフ」の例のように、藏文 *#gr* の例にも前気音が現れることがある。

前部硬口蓋破擦音に対応するのは、後続の母音が */i, e/* の場合が多い。たとえば、以下のようなものである。

tɕ ^h i 「導く」 (<i>khrid</i>)	^ɦ tɕ ^h e ʰpə 「胆嚢」 (<i>mkhris pa</i>)
---	--

ただし、藏文 *skr* の組み合わせは歯茎摩擦音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

^h sə 「髪」 (<i>skra</i>)	^h sə 「腫れる」 (<i>skrang</i>)
^h sa 「恐れる」 (<i>skrag</i>)	

そり舌閉鎖音と対応する例は、以下のようなものがある。

t ^h əʷ ʃi 「1 万」 (<i>khri gcig</i>)	^ɦ ʈa ʰlə 「山神」 (<i>dgra lha</i>)
^h ʈa ɕ ^h i 「吉祥」 (<i>bkra shis</i>)	

そり舌音で現れるのは文化語彙が多いといえる。

藏文 tr/dr 対応形式

dGonpa 方言では、(^ʰ)dr のみが確認されているが、基本的にそり舌閉鎖音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

tʰu^u 「6」 (*drug*)

ʰdʑə^u 「鬼」 (*'dre*)

蔵文 sr 対応形式

dGonpa 方言では前気音を伴う無声前部硬口蓋摩擦音が対応する。たとえば、以下のようである。

ʰɕa mə 「豆」 (*sran ma*)

ʰɕi fiɣ 「薄い」 (*srab po*)

ʰɕu 「命」 (*srog*)

4.1.7 蔵文 l (基字・足字)、lh、y (基字) 対応形式

dGonpa 方言では、基本的に蔵文基字 l、足字 l には /l/ が対応する。足字 l の場合、基本的に前気音を伴うが、kl, sl の場合は無声の前気音、それ以外は有声の前気音になる。たとえば、以下のようである。

lɔ 「道」 (*lam*)

ʰla fi 「月 (年月)」 (*zla gcig*)

lɣ 「年」 (*lo*)

ʰlu^u 「龍神」 (*klu*)

ʰlu 「歌」 (*glu*)

ʰla mə 「簡単な」 (*sla po*)

ʰlɔ ʰrɔ 「ラブラン寺」 (*bla brang*)

ʰli 「教える」 (*slob*)

ʰla 「話す」 (*zlos*)

ʰli 「到着する」 (*slebs*)

ただし、lɣ fi mə 「月 (天体)」 (*zla ? ?*) の例は、dGonpa 方言で有声前気音を伴わない形式となる点で、必ずしも対応関係を得られるものではない。

蔵文 lh 対応形式は基本的に有声の前気音を伴う /ʰl/ になる。たとえば、以下のようである。

ʰlɔ 「神」 (*lha*)

ʰlɔ sɔ 「ラサ」 (*lha sa*)

ただし、ha fiɔ 「風」 (*lhags pa*) は例外といえる。

一方、蔵文 y には /j/ が対応する。たとえば、以下のようである。

jɔ fiu 「文字」 (*yi ge*)

ʰja 「ヤク」 (*g.yag*)

jo ʰmi 「カラスムギ」 (*yug ?*)

ʰji ʰmə 「花椒」 (*g.yer ma*)

4.1.8 蔵文鼻音字対応形式

dGonpa 方言では、単独の鼻音字はそれぞれ対応する調音位置の単独の鼻音と対応する。蔵文 my は前部硬口蓋鼻音になり、ny と合流している。たとえば、以下のようである。

ma 「バター」 (<i>mar</i>)	ɲi mə 「太陽」 (<i>nyi ma</i>)
na 「森」 (<i>nags</i>)	ɲo 「経験がある」 (<i>myong</i>)
ɲə 「魚」 (<i>nya</i>)	

蔵文鼻音字に頭字 *s* を除く先行子音字を伴う場合、それぞれ調音位置の対応する有声鼻音に有声前気音が先行して現れる。たとえば、以下のようである。

^h mɛ rə 「赤い」 (<i>dmar po</i>)	^h ɲu 「銀」 (<i>dngul</i>)
^h nə fiu 「耳」 (<i>rna bo</i>)	^h ɲi 「2」 (<i>gnyis</i>)

dGonpa 方言では、蔵文鼻音字に頭字 *s* を伴う形式には、それぞれ調音位置の対応する有声鼻音に無声前気音が先行して現れる。たとえば、以下のようである。

^h me 「薬」 (<i>sman</i>)	^h ɲo m̥bɣ 「青い」 (<i>sngon po</i>)
^h nə fio 「鼻」 (<i>sna 'og</i>)	^h ɲu ^h mə 「竹」 (<i>smyug ma</i>)
^h ɲe 「心臓」 (<i>snying</i>)	

また、蔵文 *m* を初頭子音とする語が前部硬口蓋鼻音に対応するものがある。たとえば、以下のようである。

ɲə 「火」 (<i>me</i>)	ɲɛ 「名前」 (<i>ming</i>)
ɲə ^m 「人」 (<i>mi</i>)	^h ɲi 「目」 (<i>mig</i>)

これらは古蔵文において *my* とつづられていた語であり、古蔵文の形式に対応関係を求めることができる。なお、「目」の蔵文対応形式は、有声前気音が出現することから考えて、おそらく *dmyig* であろう。

4.1.9 前鼻音を含む子音連続

dGonpa 方言の前鼻音を含む子音連続は、前鼻音要素に後続する子音に無声有気音と有声音があり、それは蔵文前接字 *'*, *m* と対応するものが多い。前鼻音要素と後続する子音は、調音位置、有声性について一致する。たとえば、以下のようである。

^m bɯ ^m 「虫」 (<i>'bu</i>)	^ɳ tʰɣ m̥bɣ 「高い」 (<i>mthon po</i>)
ⁿ də 「矢」 (<i>mda</i>)	^ɳ tɕ ^h e ^h pə 「胆嚢」 (<i>mkhris pa</i>)
ⁿ dzə 「釣る」 (<i>'dzin</i>)	^ɳ ɕ ^h i 「拭く」 (<i>'phyid</i>)

ところが、前鼻音を含む例の中には、前鼻音部が前気音と交替できる例がある。たとえば ⁿdə 「昨日」 (*mdang*) は [ⁿdə] という発音とともに [^hdə] と発音しても許容される。このような語は語彙的に決まっている。

4.2 母音および母音＋末子音

ここでは、dGonpa 方言の蔵文母音 (a, i, u, e, o) + 後接字の対応形式について、後接字を伴わないとき、閉鎖音の後接字 (b, d, g) を伴うとき、鼻音の後接字 (m, n, ng) を伴うとき、それ以外の後接字 (r, l, s) を伴うときの 4 種に分類して掲げる。後接字に再後接字 s がつく場合があるが、口語形式に明確な対応関係を得られないため、以下では省略する。

4.2.1 蔵文後接字を伴わないとき

語末位置における基本的な対応関係は以下のように示すことができる²⁶。なお、末子音位置に現れる蔵文 ' は音価をもたないと考えられるため、ここに含める。

V\C	# / '
a	ə / a
i	ə / ə ^u
u	u / u ^u
e	ə
o	ɤ / o

たとえば、以下のようである。

k ^h ə 「口」 (<i>kha</i>)	^h pu ^u 「毛」 (<i>spu</i>)
^l la ma 「ラマ」 (<i>bla ma</i>)	^h kə 「首」 (<i>ske</i>)
ts ^h ə 「犬」 (<i>khyi</i>)	s ^h ɤ 「齒」 (<i>so</i>)
ŋə ^u 「人」 (<i>mi</i>)	ŋo 「顔」 (<i>ngo</i>)
ç ^h u 「水」 (<i>chu</i>)	

4.2.2 蔵文後接字が閉鎖音のとき

語末位置における基本的な対応関係は以下のように示すことができる。

V\C	b	d	g
a	i / e	e	ɑ
i		i	i / ə ^u
u	u	u	u ^u
e	i / e	i	ɑ
o	u	i / u	u / o / o ^u

以上の点を見ると、蔵文後接字 g は弱軟口蓋化母音と対応する 1 つの要素であると考えられることができる。

²⁶ / で区切っているものは自由変異ではなく、語ごとに決まったものである。すなわち対応関係が複数認められるということである。

具体例としては、以下のようである。

k ^h i 「針」 (<i>khab</i>)	p ^h a 「ぶた」 (<i>phag</i>)
ⁿ dzɯ 「指」 (<i>mdzub</i>)	^ɰ ɲi 「目」 (<i>mig</i>)
ⁿ t ^h ɥ 「手に入れる」 (<i>'thob</i>)	ⁿ ɖu ^ɰ 「龍」 (<i>'brug</i>)
^h ke 「言語」 (<i>skad</i>)	^ɰ ɖa 「刈る」 (<i>'breg</i>)
^ɰ ɲi 「飲み込む」 (<i>mid</i>)	^h ɕu 「命」 (<i>srog</i>)
pɥ 「チベット人」 (<i>bod</i>)	

4.2.3 蔵文後接字が鼻音のとき

語末位置における基本的な対応関係は以下のように示すことができる。

V\C	m	n	ng
a	ɔ	e / æ	ɔ
i		ə	e
u	o / u	ɥ	u / u ^ɰ
e	ɛ	e	
o	o	e / ɥ	o

たとえば、以下のようである。

lɔ 「道」 (<i>lam</i>)	^h pɔ 「草地」 (<i>spang</i>)
^h tsu 「閉じる」 (<i>btsum</i>)	ɕ ^h e 「薪」 (<i>shing</i>)
ɕ ^h e 「心」 (<i>sems</i>)	ⁿ ɯ ^ɰ 「少ない」 (<i>nyung</i>)
to 「熊」 (<i>dom</i>)	
^ɰ tɥ 「7」 (<i>bdun</i>)	

接辞類など後続する要素を伴うときや複合語を形成するときなど、蔵文「母音＋末尾鼻音」が語中位置にくる例の場合には、次の音節の初頭に末尾鼻音要素の対応形式として前鼻音が現れることがある。たとえば、以下のようである。

sa ^m bə 「橋」 (<i>zam pa</i>)	ⁿ t ^h ɣ ^m bɣ 「高い」 (<i>mthon po</i>)
--	--

4.2.4 蔵文後接字がその他の子音のとき

語末位置における基本的な対応関係は以下のように示すことができる。

V\C	r	l	s
a	a	æ / a	i / e
i	u	e	e / i
u	ʊ	ʊ	e
e	ə	u	i / e
o	o	o	ʊ

たとえば、以下のようなものである。

ma 「バター」 (<i>mar</i>)	^h ŋʊ 「銀」 (<i>dngul</i>)
^h cçu 「搾る」 (<i>gcir</i>)	tʊ 「騾馬」 (<i>drel</i>)
^h tʊ 「比べる」 (<i>sdur</i>)	^h ŋe 「枕」 (<i>sngas</i>)
^h kæ 「部分」 (<i>skal</i>)	^h kʊ 「衣服」 (<i>gos</i>)
tʃ ^h e 「脂肪油」 (<i>tshil</i>)	

4.3 その他の特徴

上述の分析では、そり舌化母音が現れていない。dGonpa 方言のそり舌化母音は蔵文形式に直接的に由来しないからである。そり舌化母音は限られた語彙²⁷に現れるほか、接尾辞/ra/²⁸の変異音 [ɹ] として現れる。またこの要素は、先行する音節と融合し、音声学的にさまざまな音色のそり舌化母音を形成する。

5 先行研究による記述との対照

「舟曲方言」の資料は黄布凡 (2007) や張濟川 (2009) などに少量引用されているが、全体像は不明のままである。《舟曲県誌》(1996:617-628) がもっとも多く語彙資料を提示しているが、音形式の記録は蔵文と音声記号を併用する形をとっており、その精度も高いとはいえない²⁹。

以下に黄布凡 (2007) に引用されている「舟曲方言」の形式³⁰を、筆者の記述する dGonpa 方言と Ongsum 方言³¹の事例と対比して、共通点と相違点を明らかにする。

²⁷たとえば、/p^ha ku/ 「子ぶた」や/mi ɹ/ 「猫」などがある。いずれも蔵文と対応関係を認めることはできない。

²⁸/ra/にはさまざまな意味がある。動詞接尾辞としては「現在」を示し、名詞接尾辞としては「小さい」を意味する指小辞として用いられ、また等位接続詞「～と～」としても用いられる。後ろの2つは、特定の語において先行する形態素と融合し、接尾辞/ra/を復元できないものがある。

²⁹《舟曲県誌》(1996:617-628) に併記されているアムドチベット語の形式について、有声性の記述や前鼻音の記述などに不適切な表記が含まれることに対する、筆者の判断である。

³⁰黄布凡 (2007) からの引用は、有気音の h を^hとする以外は、原文のままである。ただし、語形式から推測するに、「つるはし」と「濃い」の例について語義と語形が逆転していると考えられるため、修正して掲げる。

³¹八楞郷東岔灣 [To-yi] 村で話される。筆者が 2012 年成都において調査した。

	語義	蔵文	舟曲方言	dGonpa	Ongsum
(1)	柱	<i>ka ba</i>	ka ¹²¹	ka fia	ga
(2)	濃い	<i>ska</i>	ka ⁵³	^h ka	^h ka
(3)	さえぎる	<i>bkag</i>	ka ³⁴²	^h ka	^ŋ ga
(4)	掘る	<i>rko</i>	ky ⁵³	^h ku	^h ku
(5)	冬	<i>dgon</i>	ky ³⁴²	^{fi} ku ^h sv	^{fi} gu ɕv
(6)	白菜	<i>ke'u</i>	ky ²¹	ku	^h ku
(7)	つるはし	<i>thong</i>	t ^h u ⁵³⁽⁴²⁾	t ^h o	t ^h y
(8)	飲む	<i>'thung</i>	t ^h u ¹²	^ŋ t ^h u ^u	^ŋ t ^h y ^y
(9)	ぶた	<i>phag</i>	p ^h a ⁴²	p ^h a	p ^h a
(10)	飛ぶ	<i>'phur</i>	p ^h u ¹²	^m p ^h u	^m p ^h y
(11)	荷駄	<i>khal</i>	ngia ³⁴²	k ^h æ	k ^h æ
(12)	雪	<i>kha ba</i>	k ^h a ¹²¹	k ^h a	k ^h a
(13)	酒	<i>chang</i>	tɕ ^h uo ¹²	cɕ ^h ɔ	tɕ ^h ɔ
(14)	巢	<i>tshang</i>	ts ^h uo ¹²	ts ^h ɔ	ts ^h a ^y
(15)	馬	<i>rta</i>	ta ⁵³	^h tə	^h ta
(16)	鉄	<i>lcags</i>	tɕa ⁵³	^h cɕa	^h tɕa
(17)	7	<i>bdun</i>	ty ¹²¹	^{fi} tu	^{fi} dʒu
(18)	よい	<i>bzang</i>	zuɔ ¹²¹	^{fi} zo	^{fi} zo
(19)	昨日	<i>mdang</i>	mduɔ ¹²	ⁿ do	ⁿ do
(20)	追う	<i>'ded</i>	ti ²¹	^{fi} de	^{fi} te
(21)	心	<i>sems</i>	s ^h ɛ ¹²	ɕ ^h ɛ	ɕ ^h a
(22)	魚	<i>nya</i>	ɲe ²¹	ɲə	ɲa
(23)	薬	<i>sman</i>	miɛ ⁵³	^h me	^h mæ
(24)	膿	<i>rnag</i>	na ³⁴²	^{fi} na	^{fi} na

黄布凡(2007)の「舟曲方言」と筆者の記録には世代差が存在すると考えられるため、単純な対照には問題があるけれども、以上のデータを見てまず指摘できるのは、蔵文のさまざまな形式に対して一貫して開音節で現れる点に共通点を認めることができる一方、黄布凡(2007)の記述ではピッチによる声調の対立が認められるが、筆者の記述では認めないという異なりが存在する。確かに dGonpa 方言も Ongsum 方言も特徴的なピッチの高低を認めることができるが、筆者の分析では、いずれの方言もピッチは音韻単位として機能していないとする。

次に初頭子音について見ると、黄布凡(2007)の記述では(11, 19)の例に初頭子音連続が認められるが、筆者の記述では(2-5)などほかの例にも認められる。加えて(19)について、先行研究が/md/としている点は筆者の記録においていずれも^md/となっており、子音連続の性質もまた異なっている。また、子音の調音位置を見ると、(13, 16)について、蔵文 *c*, *ch* の音対応が黄布凡(2007)の記述と Ongsum 方言が一致し、

dGonpa 方言の形式が異なっている。

続いて母音の形式を見ると、黄布凡 (2007) の記述には (11, 13, 14, 18, 19, 23) のようにさまざまな母音連続 (二重母音) が認められるが、筆者の記述には全くない。しかしながら、先行研究と筆者の記述には対応関係が認められ、(13, 14, 18, 19) について、先行研究の /uo/ は筆者の記述では多く /ɔ/ となっている³²ほか、(11, 23) についても先行研究の /ia/ が /æ/ と対応しているのではないかと考えられる。

以上に指摘した諸特徴を考えると、3 種の方言は類型的に似通った特徴をもっていることは事実であり、その中に細部の異なりがあるといえる。ただし、超分節音素の取り扱いが異なるのは、2 節で述べた研究史を考えると厄介な問題であり、より詳しい考察が必要である。

6 dGonpa 方言の超分節音素的特徴³³

前節の考察から、先行研究と本稿の超分節音素の分析について、どのような異なりがあるのかが判明した。本節では、dGonpa 方言の超分節音素的特徴について、蔵文との対応関係の観点から考察を進める。

dGonpa 方言には、際立つ超分節音素的特徴が存在する。それは「息漏れ音」である。それに合わせてピッチの高低も生じている。しかし、その音声学的特徴があまりにも明瞭であるにもかかわらず、3 節で示したように、dGonpa 方言に共時的な観点から超分節音素を認める必要性はないと結論づけている。その理由は、すべての息漏れ音の現れる条件がはっきりしており、有声声門摩擦音の出現と関連づけることができるからである。

さて、息漏れ音は発声類型の 1 つに数えられる音特徴である (朱曉農 2010)。その音声学的特徴を見る限り、息漏れ音は有声声門摩擦音と互いに近い関係にあるため、両者を関連づけるのは音声学的観点から見て問題ない。このとき、息漏れ音という性質とピッチによる声調の間に認められるべき関連とはどのようなものであるかが問題となってくる。これを理解するためには、発声類型とピッチの関連を整理しておく必要がある。それに続いて、dGonpa 方言の息漏れ音の出現環境について、蔵文との対応関係を明らかにする。

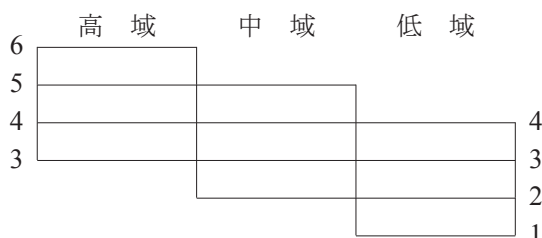
³² この差異は分析の結果である。筆者の記述による /ɔ/ は、たとえば (13, 14) のような例ではそれぞれ [cɕ^{hw}ɔ, ts^{hw}ɔ] のように、軽微な円唇化が起こりうる。この円唇化の性質は必ず現れる要素ではなく、またその聞こえも非常に弱い。このため、記述には反映させていない。このような現在の dGonpa 方言の状況から、/uo/ から /ɔ/ への音変化が進行しつつあるのではないかと考えられる。

³³ 本節は第 28 回チベット＝ビルマ言語学研究会 (2012 年 12 月; 於神戸) において発表した内容に基づいている。

6.1 発声類型とピッチの関係についての理論的枠組み

発声類型は発声時の声帯の特徴の異なりを表し、言語音の中では最大 13 種類が有意な区別と認められる (朱曉農 2010)。たとえば、「有声音」と「無声音」の違いは、そのまま発声類型の違いにとらえられ、ほかにも「仮声 (ファルセット)」、「きしみ音」、「息漏れ音」なども発声類型の諸特徴に認められる。肺気流を使う言語音であれば何であれ、発音されると発声類型が指定されることになる。

発声類型の差異は、相対的にピッチの高低に関わることがある。ただし、発声類型が指定されることによってピッチの高低が定まるとは言えない。この分析の鍵は朱曉農 (2010) の提唱する「声調分域論」にある。「声調分域論」における「域」とは、朱曉農 (2012:33, 55) において Rg と略号が当てられていることから、対応する英語の術語に *register* を意図しているのではないかと考えられ、「レジスター」と呼べるだろう。朱曉農 (2010) では、発声類型に基づいて「高域」「中域」「低域」の 3 つに分かれるとし、それぞれの域内で 4 度のピッチの差異を設けている。つまり、「高域 (6~3)」「中域 (5~2)」「低域 (4~1)」となる。これは従来ピッチの差異 (すなわち声調) を 5 度で表示してきた方式を改め、新たに高位 (6) を設ける一方、各域内では 4 度の記述で十分であることを意味している³⁴。これを図示すると、次のようになる。



朱曉農 (2010:294-297) の分域による声調の記述には漢語の例があがっており、北京語は中域のみの 4 声調、粵語廣州方言は中域のみの 9 声調、吳語上海方言は中域と低域の 2 域 5 声調、吳語温州方言は 3 域 8 声調といった記述が行われている。

6.2 dGonpa 方言の超分節音的音特徴と蔵文対応形式

dGonpa 方言においては、音節を構成する最初の部分すなわち初頭子音の発声類型が問題になる。以下、蔵文との対応からみる dGonpa 方言の超分節音的音特徴をまとめる。dGonpa 方言については、蔵文で基字に先行する子音字が存在する場合の現

³⁴このようにピッチの高低を細分化する必要性については、朱曉農等 (2012) における 6 つの平調がある言語 (魚糧苗語) の記述において必要不可欠であることから、説明を与えられるといえる。また、理論的にもっとも複雑な体系を与えておいて、必要に応じて簡略化するという考えを筆者は支持したい。

象を説明するため、蔵文の基字の性質に基づいて次のように分ける必要がある。

非有声閉鎖/破擦音字：*k, kh, c, ch, t, th, p, ph, ts, tsh, Ø(=a chen)*

有声閉鎖/破擦音字：*g, j, d, b, dz*

無声摩擦音字：*sh, s, h*

有声摩擦音字：*zh, z, ’*

共鳴音字：*ng, ny, n, m, w, y, l, r*

基字に先行する子音字がない場合は、分類する必要はないようである。また、1を除く足字の現れは以上の分類とは無関係である。足字1は共鳴音字1に先行子音字を伴うものとして扱う。なお、母音の二次的調音は母音それ自体か末子音に由来するため、超分節音的音特徴とはかかわりがない。

なお、dGonpa 方言は音体系の中でピッチの差異を弁別的に用いない³⁵。特定の初頭子音に特定の高さが現れる傾向が認められるのみである。以下では「ピッチ高さ X」といった表現を用いるが、Xの数値は6.1で掲げた図に記載されている1～6の6段階に基づき、基本的には^[XX]またはXを始点とする下降調もしくはXより低い高さが現れる。たとえば、「ピッチ高さ4」という記述の場合、^[44, 42, 41, 33, 31, 22]といった実現があり、どれで発音してもよい。また、5の高さが現れうるか1の高さが現れうるかを1つの基準に、中域と低域に振り分ける。

A. 基字に先行子音を伴わない形式：ピッチ高め

前接字・頭字を伴わない形式（基字単独もしくは足字つき）は、実際の発音がピッチ高さ4程度、もしくはそれより低く発音される。口語形式における有声音は低域、非有声音は中域で発音されているといえる。口語形式で、と断っているのは、蔵文有聲閉鎖/破擦/摩擦音字の dGonpa 方言における対応形式が無声音であるためである。

p^ha 「ぶた」(*phag*)

pa mo 「霜」(*ba mo*)

tu^m 「6」(*drug*)

ka fia 「柱」(*ka ba*)

k^hə 「口」(*kha*)

ts^hə 「犬」(*khyi*)

ts^ha 「血」(*khrag*)

sə 「鶏」(*bya*)

x^hə 「肉」(*sha*)

ma fiu 「婿」(*mag pa*)

rə^m 「山」(*ri*)

^hca mə 「豆」(*sran ma*)

ピッチに関して、ピッチ高さ3や2で発音することも可能であるが、ピッチ高さが5か1になることはほとんどない。このことから、低域であっても中域であって

³⁵ただし、母語話者が方言差異を知覚するのにピッチの実現を考慮に入れる場合がないとは言えない。この点についてはまだ調査を行っていないため、不明である。

も、同じピッチパターンが現れることになる。この場合、分域の必要性は認められないように見えるが、低域のものは「初頭子音が有声声門摩擦音で始まる接辞 (fia, fie, fi, fiu, fiə など) が後続する」という条件のもとで通常は息漏れ音で発音される。中域については、ピッチ高さ 4 が現れる場合は息漏れ音が現れないが、接辞の影響で低めのピッチで現れる場合は息漏れ音が現れる。この点で低域と異なる。

形式	音声実現例	語義 (蔵文)
lo fia	[lɔ ³³ fi̯a ¹¹]	谷 (<i>lung ba</i>)
s ^h a fi	[s ^h a ⁴⁴ fi̯i ¹¹ , s ^h a ²³ fi̯i ¹¹]	場所 (<i>sa cha</i>)
ka fia	[ka ⁴⁴ fi̯a ¹¹ , ka ²³¹]	柱 (<i>ka ba</i>)

例外に蔵文 ' がある。この対応形式は決して高く発音されることはない。加えて、音節全体に通常息漏れ音が生じる。

形式	音声実現例	語義 (蔵文)
fia	[fi̯a ¹²]	私 ('a)
fiɔ ^m nə	[fi̯ɔ ^{m13} nə ²²]	下 ('og na)

B. 前接字 ' , m を除く先行子音字 + 非有声閉鎖/破擦音基字の形式：中域ピッチ高め

前接字 ' , m を除く前接字・頭字 + 非有声閉鎖/破擦音基字の形式は、基字対応形式は無声音で無声前気音を伴い、ピッチ高さ 5 で発音される。

^h tə 「馬」 (<i>rta</i>)、 ^h li 「見る」 (<i>lta</i>)	^h tɯ 「猿」 (<i>spre'u</i>)
^h kæ 「部分」 (<i>skal</i>)	^h tsə fiu 「糞」 (<i>skyar pa</i>)
^h pɔ 「草原」 (<i>spang</i>)	^h tɕi 「1」 (<i>gcig</i>)

C. 前接字 ' , m を除く先行子音字 + 有声閉鎖/破擦音基字の形式：低域ピッチ低め

前接字 ' , m を除く前接字・頭字 + 有声閉鎖/破擦音基字の形式は、基本的に基字対応形式が無声音で有声前気音を伴いかつ低域で発音される。しばしば息漏れ音を伴い、基字対応形式も有声音で発音される例がある。

^{fi} tɣ 「石」 (<i>rdo</i>)	^{fi} tsa 「貼る」 (<i>sbyar</i>)
^{fi} kə 「鞍」 (<i>sga</i>)	^{fi} tɕə fiu 「蚤」 (<i>lji ba</i>)
^{fi} tsə 「漢族」 (<i>rgya</i>)	^{fi} də fiu 「村」 (<i>sde ba</i>)

D. 前接字 ' , m + 閉鎖/破擦音基字の形式：低域

前接字 ' , m + 閉鎖/破擦音基字の形式は、基字が有声・非有声にかかわらず、前鼻音を伴いかつ低域で発音される。低域になるというのは、ピッチ高さ 1 での発音が

存在するからであり、また前鼻音部が有声声門摩擦音と交替する事例もまた認められるからである。また、前鼻音部が脱落したり、息漏れ音が現れる場合もある。

たとえば $p^h a$ 「ぶた」(*phag*) と $^m p^h a$ 「高貴な」(*'phags*) は、前鼻音の有無だけではなく、後者について音節全体を通して相対的にピッチが低く、かつ息漏れ音が現れうるという点で異なる。有気音に先行する前鼻音は、次のようにさまざまな変異を見せる。

形式	音声実現例	語義 (蔵文)
$p^h a$	$[p^h a^{44}]$	ぶた (<i>phag</i>)
$^m p^h a$	$[^m p^h a^{33}, ^m p^h a^{33}, ^m p^h a^{33}, ^m p^h a^{33}, p^h a^{33}]$	高貴な (<i>'phags</i>)

以上のように、前鼻音を伴うものは有気音の気音成分が異なったり、極端な場合前鼻音部が脱落したりもする。これは有聲前鼻音の場合にもあてはまる。

$^n d a$ 「矢」(<i>mda</i>)	$^n t e^h e^h p a$ 「胆嚢」(<i>mkhris pa</i>)
$^n d z a$ 「釣る」(<i>'dzin</i>)	$^n c^h i$ 「拭く」(<i>'phyid</i>)

E. 先行子音字＋無声摩擦音基字の形式：中域ピッチ高め

前接字/頭字＋無声摩擦音基字の形式は、基字対応形式は無声音で無声前気音を伴い、ピッチ高さ 5 で発音される。

$^h s y$ 「育てる」(<i>bso</i>)	$^h c c a$ 「ほとぼしる」(<i>gshar</i>)
$^h c i na$ 「金 (きん)」(<i>gser nag</i>)	$^h c u$ 「鍬」(<i>gshol</i>)

F. 先行子音字＋有聲摩擦音基字の形式：低域ピッチ低め

前接字/頭字＋有聲摩擦音基字の形式は、基本的に基字対応形式は有聲音で有聲前気音を伴いかつ低域で発音される。

$^f z a^h p o$ 「体」(<i>gzugs po</i>)	$^f z j i$ 「剃る」(<i>bzhar</i>)
$^f z i$ 「豹」(<i>gzig</i>)	$^f y o^m$ 「削る」(<i>gzhog</i>)

G. 頭字 s＋共鳴音基字の形式：中域ピッチ高め

頭字 s＋共鳴音基字の対応形式は、無声前気音を伴った $^h m, ^h n, ^h \eta, ^h \eta$ であり、常に中域で発音され、通常ピッチ高さ 5 になる。

$^h m e$ 「薬」(<i>sman</i>)	$^h n u^f m a$ 「竹」(<i>smyug ma</i>)
$^h n a^f i u$ 「鼻」(<i>sna ba</i>)	$^h \eta a$ 「呪文」(<i>sngags</i>)

H. 頭字 s を除く先行子音字 + 共鳴音基字の形式：低域ピッチ低め

共鳴音基字が頭字 s を除く子音に先行されている事例（足字 l の場合も含む）においては、基本的に有声前気音を伴った /^hm, ^hn, ^hɲ, ^hŋ, ^hj/ で実現される。場合によって音節全体を息漏れ音で発音することがあり、いずれもピッチ高さ 1 ～ 2 になる。

頭字 r + 共鳴音基字の組み合わせの場合、高い頻度で音節全体が息漏れ音で発音され、ピッチ高さ 1 であることが多い。

^hmɛ rɔː 「赤い」 (*dmar po*)

^hɲi 「目」 (*mig (dmyig)*)

^hnə fiu 「耳」 (*rna ba*)

^hja 「ヤク」 (*g.yag*)

I. s と k を除く基字 + 足字 l の形式および lh：低域

s と k を除く基字 + 足字 l の対応形式および lh は有声前気音を伴った /^hl/ になるのが多数である。ピッチは特に指定されないが、低めで発音される事例が多い。

^hlɔ 「牛」 (*glang*)

^hle mɔx 「湿った」 (*rlon po*)

^hla ma 「ラマ」 (*bla ma*)

^hlɔ 「神」 (*lha*)

^hlɔ ^hrɔ 「ラブラン寺」 (*bla brang*)

^hlɔ 「月（年月）」 (*zla*)

J. 基字 s, k + 足字 l の形式：中域ピッチ高め

基字 s, k + 足字 l の対応形式は無声前気音を伴った /^hl/ になり、通常はピッチ高めで発音される。

^hla mə 「簡単な」 (*sla ma*)

^hlu^u 「龍神」 (*klu*)

K. 例外

中域・低域は口語形式の特徴であるから、藏文と関連が認められても口語形式が例外的な特徴をもっている場合がある。

^hɬa fia 「数珠」 (*phreng ba*)：低域、藏文に ʾ, m の先行子音字なし

ha fiə 「風」 (*lhags pa*)：中域、藏文 lh の特殊な音対応

le fiɪ mə 「月（天体）」 (*zla ba* ?)：中域、藏文 zl の特殊な音対応か

まとめ：藏文と対応する「域」の整理

以上に述べたことを共時的観点から整理すると、息漏れ音によって代表される低域とそれ以外の中域は、前気音および前鼻音の有無に基づいて、次のようになる。

- 初頭子音が単子音である場合は、その単子音の有声/無声の性質に従って域が決まり、いずれも高ピッチで発音する。[A]

- 無声の前気音は後続子音にかかわらず、中域高ピッチで発音する。[B, E, G, J]
- 有声の前気音は後続子音にかかわらず、低域低ピッチで発音する。また、有声声門摩擦音が初頭子音である場合も低域低ピッチで発音する。[C, F, H, I]
- 前鼻音は後続子音にかかわらず、低域で発音する。[D]

これを蔵文との関係から見ていくと、次のようになる。

- すべての先行子音を伴わない蔵文は基字と対応する発音の有声性に従って域が決まる。
- 共鳴音基字に s が先行する場合、低から中への変域が起こる。
- 基字に ' または m が先行する場合、有声性にかかわらず低域に関連づけられる。
- 非有声音基字に '、m 以外が先行する場合、中域に関連づけられる。
- 以上に述べた環境以外の場合、低域に関連づけられる。

前鼻音が低域と関連づけられるのは、前鼻音部の発音が本来的に「鼻腔を經由した息漏れ」であるからではないかと考える。現在のところ、この音声現象を表す音標文字がないため、的確な記述がほとんどない。なお、dGonpa 方言に類似の前鼻音現象をもつものに、アムドチベット語（一部方言のみ）も挙げられる（鈴木 2004）。

6.3 dGonpa 方言の超分節音的音特徴に関する問題

以上に整理した点から明らかなように、dGonpa 方言の超分節音的音特徴は蔵文とほぼ直接的な対応関係がある。そのため、通時的観点から超分節音的音特徴を説明できるということが結論となる。これによって、共時的分析において記述される有声前気音や前鼻音といった特徴が蔵文からの音変化と直結して理解され、これらの音特徴が「息漏れ音」という非常に際立つ超分節音的音特徴と関連づけられるだけであると説明でき、それはまたピッチの高低という形では記述できないということになる。

この分析によってなお説明のできない問題点は、次のようなものである。dGonpa 方言において設定された例外的現象に、蔵文'対応形式が高ピッチで発音されない、というものがある [A]。なぜこのような例外が生じているのだろうか？これは、蔵文'対応形式である /ŋ/ という音を子音という分節音素と認めた分析に問題があって、たとえば「声門摩擦音は分節音ではない」と定義してみたら、異なった分析が可能になるかもしれない。その場合、前気音も声門摩擦音の一種であるから、結果とし

て上で子音連続として扱ってきたものも実はそうではない、ということになる。このとき、声門摩擦音成分は何であるのかを定義する必要があるが、それが超分節音的音特徴の一種であると理解し、無声前気音を「舌が調音位置に達するという調音動作が完了するまでに要する時間における気流」、有声前気音を「息漏れ音の条件変異」とすれば、言語事実の観察としては初頭子音位置に明確な声門摩擦音が聞こえる点で納得いかない部分もあるけれども、有声声門摩擦音が高ピッチにならないという原因として「息漏れ音は低レジスターの低ピッチに属する超分節音的音特徴であるため、高ピッチとは共起しない」というように、うまい具合に説明がつく (cf. 麦耘 2012:34-36)。

以上のように声門音を取り扱える可能性があるならば、先行研究との間に生じている矛盾もまた説明が可能になる。先行研究では mBrugchu 方言に声調が認められ、黄布凡 (2007) は 5 調位 6 調値を認める。同様の矛盾は dPalskyid (巴西) 方言群の記述において、孫天心 (2003) と黄布凡 (2007) の間にも認められる。この種の矛盾は、先に述べた声門音に関する分節音と超分節音的音特徴の認定に根本的な違いがあることから生じていると考ええると、理解できるところが出てくる。しかしながら、このような推断を繰り返して言語資料を取り扱うのは非常に多くの問題を生じさせることが必至であるため、現段階では依拠する分析の異なる資料を混在させて扱うのは避けるほうがよいだろう。

6.4 類型的観点から見た dGonpa 方言の超分節音的音特徴

6.2、6.3 で検討した dGonpa 方言の息漏れ音とピッチの関係が示すのは、息漏れ音 (有声声門摩擦音も含む) が現れないすべての例において高ピッチで発音することが可能かつ通常であるということである。同節で見た dGonpa 方言の状況はこれまでのチベット語における声調発生論とは根本的に異なる超分節音的音特徴であることを示している。dGonpa 方言と同様の超分節音的音特徴は、四川・甘肅の境界を挟んだ地域に分布する、来源を同じくしないと見込まれる方言群³⁶に認められる。これらの方言について、舟曲県以外の主要な分布地域名と先行研究を列举すると以下のようになる³⁷：

- 卓尼 [Co-ne] : rNam-rgyal Tshe-brtan (2008)、楊士宏 (2009:85-95)、鈴木 (2012)
- 迭部 [The-bo] : 共確加措 (1987)、楊士宏 (2009:85-95)
- 巴西 [dPal-skyid] : 孫天心 (2003)、鈴木 (2007)、Suzuki (2005a)

³⁶Tournadre & Suzuki (forthcoming) はこれを Eastern Section というグループに分類する。

³⁷以下に示すのは地域別になっており、言語群別ではない点に注意が必要である。

- 九寨溝 [Khod-po-khog] : 鈴木 (2008, 2013)、Suzuki (2009)
- 松潘 [Shar-khog] : 鈴木 (2005a, 2010, 2011)、Suzuki (2005b, 2008, 2009)

翻って、瞿霏堂 (1981)、江荻 (2002:260-283)、王雙成 (2012:328-335) などこれまでのチベット語の声調発生論は蔵文の有声性に由来するピッチの差異の発生に焦点を当てている。これまでに記述されてきた諸方言は、蔵文の単独有声音字を初頭子音とする形式は低声調で現れるのが通常とされているが、それがもしある方言形式で高声調で始まっている場合、より古い形式において先行子音を伴っていたのではないかと考えてきた。現にいくつかの事例では例証され、たとえば「目」は *mig* が蔵文形式であるが、多くの方言で高声調はじまりとなる。しかし古蔵文には *dmig* / *dmyig* という形式が認められるため、「口語形式は古蔵文に由来する」と説明を与えられる。しかし音声の観察を振り返れば、dGonpa 方言がまさにそうであるように、声調が高くなる音声学的条件に先行子音が必要という前提は不必要である³⁸。6.1 で述べた声調分域論を見れば、低域に分類される有声音は相対的に低いピッチを持つのかもしれないが、それでも4～1の高度幅が存在するのだから、有声音はピッチ高さが1でない限り、中域に属する無声音とピッチ高さが共通になりうる。

もしもこれまでのチベット語方言の記述における声調をピッチ型超分節音と呼ぶならば、dGonpa 方言のような超分節音的音特徴を備えたものはレジスター型超分節音と呼ぶことができる。上に挙げた方言群の中には、「レジスター」という音韻特徴を有するものがあり、息漏れなどの音声実現を共有している。超分節音素のタイプをこのように2種に分割する場合、6.1の図に基づけば、上下方向に生じる差異がピッチ型、左右方向に生じる差異がレジスター型となるだろう³⁹。また、レジスター型超分節音素は、その音声実現におけるピッチの差異を有意と認識するような改新を経ることによって、ピッチ型超分節音素に変異することが可能であるかもしれない。その例にCone (卓尼) 方言群を挙げることができるだろう (鈴木 2012)。

³⁸ 事実、ピッチで弁別をしないアムドチベット語では、多くの方言で *mar* 「バター」、*la* 「峠」、*nya* 「魚」といった語がみな高降調で発音されるうえ、初頭子音の調音に先行子音が存在した痕跡はどこにも認めることができない。

³⁹ なお、ピッチ型超分節音素はいかなる場合においてもピッチの差異が有意にはたらくものと考えことから、「特定の音素についてのみピッチが弁別的に作用する」言語というのは、「特定の音素についてはピッチについて鈍感であってよい」ということを含意するため、ピッチ型超分節音をもつ言語として考えることは難しい。「特定の音素についてのみピッチが弁別的に作用する」という記述は Nagano (1980) の Ketshal (十里) 方言や Lin (2002) の Thewo-stod (鉄布) 方言などに認められる。このような方言はレジスター型超分節音がピッチ型超分節音に変異する過程にあるのかもしれない。前者については鈴木 (2005a) がレジスター型超分節音素をもつ言語であるとしている。

7 まとめ

本稿では舟曲県のチベット語諸方言の分布と方言分類について概観したのち、同県拱壩郷で話されるチベット語 dGonpa 方言の蔵文との対応関係を明らかにし、その特徴を議論した。dGonpa 方言を特徴づける音対応として、蔵文足字 y, r を伴う形式の多様な対応関係、また母音 /i, e, æ, u/ と共起するときの初頭子音の調音位置の制限、母音＋末子音の対応形式がすべて開音節となる点などをあげることができる。

そののち、舟曲県の方言に言及する黄布凡 (2007) の資料と筆者の記述とを対照し、その異同について検討した。その過程で、先行研究では同一方言群に割り当てられる dGonpa 方言と Ongsum 方言との間における少くない異なりが明らかとなった。さらに多くの変種の記述を通して、方言群の全体像を明らかにする必要がある、かつ新しい、より細かな分類も必要とされる。以上に加えて、先行研究と筆者の分析の間に見られる最大の相違点すなわち超分節音素の有無について、朱曉農 (2010) で議論されるピッチとレジスターの異なりを分かち「分域」の観点から詳細に考察を進め、なぜ異同が生じるのかを明らかにした。

参考文献

- 鈴木博之 (2004) 「アムドチベット語チャブチャ・チェルジェ牧民方言の音声分析」『京都大学言語学研究』第 23 号 145-165
- (2005a) 「チベット語松潘・九寨溝 [Sharkhog] 方言の超分節音素」『アジア・アフリカ文法研究』第 33 号 1-37
- (2005b) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1-23
- (2007) 「チベット語包座 [Babzo] 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 74 号 101-120
- (2008) 「ヒャルチベット語九寨溝・玉瓦 [gZhungwa] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 3 号 135-168
- (2010) 「ヒャルチベット語松潘・大寨 [Astong] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 5 号 117-155
- (2011) 「チベット語諸方言に認められる喉頭特徴の多様性」『音声研究』第 15 巻 2 号 52-60

- (2012) 「甘肅省甘南州卓尼県のチベット語方言について—蔵文対応形式から見た扎古録 [Bragkhoglung] 方言の方言特徴—」『京都大学言語学研究』第31号 1-23
- (2013) 〈九寨溝口内外藏語語音面貌〉『アジア言語論叢』9, 37-76
- 西義郎 (1986) 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11巻4号 837-900 + 1 地図
- 西田龍雄 (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社
- Bon gDugs-dkar (2013) '*Brug-chu rdzong Lha-yul sde'i thur-mgur gyi glu-tshig zhib-jug*'. (《舟曲県勒突古歌詞研究》) 西南民族大学畢業論文
- Lin, You-Jing (2002) *Phonological profile of Thewo Tibetan*. Paper presented at the 8th Himalayan Languages Symposium (Bern)
- Nagano, Yasuhiko (1980) *Amdo Sherpa Dialect: A Material for Tibetan Dialectology*. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa
- rNam-rgyal Tshe-brtan (2008) *Co-ne'i bod-skad-la dpyad-pa*. (《藏語卓尼話研究》) 中央民族大学碩士論文
- Sum-bha Don-grub Tshe-ring (2011) *Bod-kyi yul-skad rnam-bshad*. 中国藏學出版社
- Suzuki, Hiroyuki (2005a) *Dialectological particularity of A-skyid-rong [Axirong] Tibetan —special reference to Songpan and Aba Tibetan—*. Paper presented at 38th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Xiamen)
- (2005b) Einige Bemerkungen über den Ursprung des *creaky* Tons im Tibetischen von Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Kyoto University Linguistic Research* 24, 45-57
- (2008) Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l'est d'Aba : phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 31.1, 85-108
- (2009) Tibetan dialects spoken in Shar khog and Khod po khog. *EAST and WEST* Vol. 59: 1-4 / Samten G. Karmay & Donatella Rossi (eds.) *Bon: the Everlasting Religion of Tibet — Tibetan Studies in Honour of Professor David L. Snellgrove / New Horizons of Bon Studies* 2, 273-283, Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente

- (forthcoming) *Esquisse phonétique du tibétain de dGonpa : un dialecte parlé à mBrugchu.*
- Tournadre, Nicolas & Konchok Jiatso [dKon-mchog rGya-mtsho] (2001) Final auxiliary verbs in literary Tibetan and in the dialects. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 24.1, 49-111
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan*
- Zhang, Jichuan (1996) A sketch of Tibetan dialectology in China : Classifications of Tibetan dialects. *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115-133
- 周毛草 [’Brug-mo-mtsho] (2003) 《瑪曲藏語研究》民族出版社
- 洲塔 [’Brug-thar] (1996) 《甘肅藏族部落的社會與歷史研究》甘肅民族出版社
- 洲塔 [’Brug-thar]、喬高才讓 [Chab-’gag Tshe-ring] (2011) 《甘肅藏族通史》甘肅民族出版社
- 甘肅省舟曲縣地方誌編纂委員會 (1996) 《舟曲縣誌》生活・讀書・新知三聯書店
- 黃布凡 (2007) 〈藏語聲調的發生和分化條件〉《藏語藏緬語研究論集》22-37 中国藏學出版社 [原文 Hajime Kitamura et al. (eds.) (1994) *Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics*, 992-998 所収]
- 江荻 (2002) 《藏語語音史研究》民族出版社
- 格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社
- (2004) 《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社
- 共確加措 [dKon-mchog rGya-mtsho] (1987) 〈色繞龍哇藏語初探〉《西藏研究》第 2 期 53-69
- 麦耘 (2012) 〈語音體系與國際音標及其對應〉《民族語文》第 5 期 33-43
- 瞿霽堂 (1981) 〈藏語的聲調及其發展〉《語言研究》第 1 期 177-194
- (1996) 《藏族的語言和文字》中国藏學出版社
- 瞿霽堂、金效靜 (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第 3 期 76-84
- 孫天心 (2003) 〈求吉藏語的語音特徵〉《民族語文》第 6 期 1-6
- 王雙成 (2012) 《藏語安多方言語音研究》中西書局

藏文対応形式から見た舟曲県チベット語拱壩 [dGonpa] 方言の特徴—舟曲県チベット語の概説を添えて—

楊士宏 (2009) 《安木多東部藏族歷史文化研究》民族出版社

張濟川 (1993) 〈藏語方言分類管見〉戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297-309 中央民族學院出版社

—— (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社

朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

—— (2012) 《音法演化—發聲活動》商務印書館

朱曉農、石德富、韋名應 (2012) 〈魚糧苗語六平調和三域六度標調制〉《民族語文》第4期 3-12

付録：舟曲県の地図

以下の地図は Google Maps から抽出したものである。地図内の地名の表記が簡体字になっているほか、一部古い情報で表示されている。

図 1：中国（黄河流域部）における甘肅省蘭州と舟曲県の位置



図 2：甘肅省南部と舟曲県の位置（印は舟曲県城城關鎮）

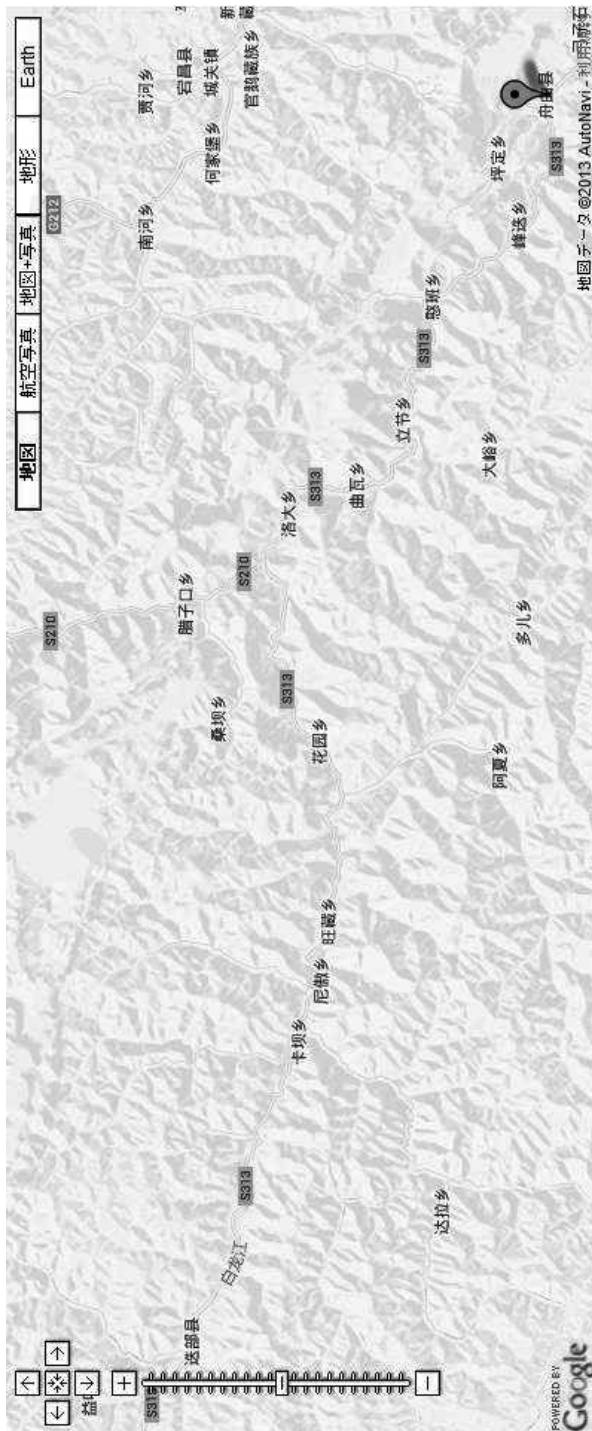


蔵文対応形式から見た舟曲県チベット語拱壩 [dGonpa] 方言の特徴―舟曲県チベット語の概説を添えて―

図 3：舟曲県南東部の各郷鎮（印は dGonpa 方言の話される拱壩郷）



図 4：舟曲県北西部と迭部県の位置関係（印は舟曲県城城關鎮）



Particularité du dialecte de dGonpa parlé à mBrugchu comparé à la forme du tibétain écrit

—avec une petite introduction aux dialectes tibétains de mBrugchu—

Hiroyuki SUZUKI

résumé

Les dialectes du tibétain parlés dans le district de Zhouqu [’Brug-chu] (préfecture de Gannan, province de Gansu en Chine) sont remarquables par leurs différences avec les dialectes de l’Amdo. Cet article essaie de décrire des correspondances de son entre le tibétain écrit et la variété de Gongba [dGon-pa] avec une brève comparaison entre la particularité dialectale de dGonpa et celle d’autres variétés de mBrugchu, incluant celle décrite dans Huang Bufan (2007).

D’abord, le dialecte de dGonpa se caractérise par les traits suivants : la structure de la syllabe qui est toujours ouverte ; correspondances phonétiques variées notamment les souscrites du tibétain écrit incluant *ra-btags* ou *ya-btags* ; la limitation du mode articulatoire de l’initiale avant /i, e, æ, u/. Puis, cet article a examiné la similarité et la différence entre la description de Huang (2007) et les miennes. Les trois dialectes, *mBrugchu* (décrit dans Huang 2007), dGonpa et Ongsum, ne sont pas typologiquement similaires du point de vue du voisement et du ton. Il faut donc poursuivre l’étude distinguer des variétés parlées dans le district de mBrugchu. Cet article a aussi examiné en détail le caractère suprasegmental non-phonologique en appliquant la théorie proposée par Zhu (2010) de “la séparation des registres,” qui sépare la phonation et la hauteur.

Annexe : classification hypothétique des langues parlées dans mBrugchu

- tibétain de Thewo
 - groupe dialectal de Thewo-smad
- tibétain de mBrugchu
 - groupe dialectal incluant le dialecte d’Ongsum
 - groupe dialectal incluant le dialecte de dGonpa
 - groupe dialectal incluant le dialecte parlé dans le village de Jiangpan

et

- Baima

受領日 2013年5月14日

受理日 2013年7月17日